

中学校の理科教師として現場に14年間、毎年いろいろな生徒たちや先生方に恵まれ、楽しく仕事をしてきた。とりわけ担任として関わる学校行事には思い入れがある。体育祭では思うようにいかず試行錯誤を続ける姿に感銘を受け、修学旅行では学校とは少し違った表情に新鮮さを感じた。中でも私が特に好きだったのは、校内で行う合唱コンクールだ。生徒の歌声が少しずつまとまり、響きが変わっていく過程を特等席で聴けるのがたまらない。そんな私にとって忘れられないのが、令和2年度の1年間である。

令和2年2月の一斉休校を受け、令和2年度は異例の「休校」から始まった。3年生の担任を任された私は、生徒のいない教室を整えたり、物品の共有を避けるための実験方法を考えたりと、普段と異なる新学期準備だった。分散登校が始まり、ばらばらではあるものの、生徒が学校に戻り始めた。結局、クラス全員がそろったのは6月半ば。それでも消毒の徹底、マスクの常時着用、給食は黙食という生活。授業や部活動も制限が多い中、思春期の中学3年生が本当によく頑張っていると感じていた。

当然、修学旅行は実施できなかった。中学校生活で一番の思い出として挙げる生徒が多いだけに、不憫でならなかった。一方で、例年秋に行っていた合唱コンクールは、生徒の頑張りや先生方の工夫によって何とか実施できた。練習は常にマスクを着け、インナーフレームも使いながら歌う日々。間隔を十分にとるため、実行委員の生徒が教室での立ち位置を丁寧に目張りしてくれた。それでも40人は教室に入りきらず、ローテーションで歌ったり、校舎の外に出て歌ったりと工夫していた。多くの制限の中で一致団結して合唱に取り組む姿に、中学生の強さとひたむきさをあらためて思い知らされた。

コンクール本番は市内ホールで開催された。私のクラスの曲目は「信じる」、結果は一番上の「金賞」だった。担任として最初で最後の優勝だった。担任としてできたことは見守ることぐらいであったが、駅のホームで代表生徒と交わした「やりましたね」という短い会話は、今でもその映像が鮮明に残っている。

令和8年が始まり、休校から始まったあの1年に担任した子供たちが、成人式を迎える年齢になる。当時はマスクで顔の半分しか見られなかった子供たちだが、今では立派な成人として、クラスの合言葉だった“ステキな人”になっていることだろう。子供たちとのこうした出会いや思い出をもらえることこそ、教師という仕事の魅力の一つだと思う。今は教育行政職員の一員として、教育現場を少しでも支えていきたいと、学級委員直筆の同窓会の招待状を手にとり改めて感じている。

(Y.S.)

